第５４回　釜ケ崎メーデー宣言（案）「労働者のための永続的な闘争を！」

労働者の日としてのメーデーは、一八五六年にオーストラリアで８時間労働制要求のための統一ストライキを行ったことが始まりだ。このストライキがアメリカの労働者を元気づけ、５月１日はあらゆる労働を放棄して休止すると決めたことが世界的な規模での第一回のメーデーとなった。では何がアメリカの労働者をそこまで元気づけたのか？それをローザ・ルクセンブルクは奴隷状態となっていた労働者が、自発的に労働を放棄するというストライキによって、**自分たちの力量を信頼し、それを眼のあたりに確認したからだという**。自分たちにもやれるんだ、という確信は、次の闘争へと時空を超えて、確実に引き継がれる。

ここ釜ケ崎でも日々孤立する労働者が連帯し、実力闘争が組まれてきた。メーデーでは夏冬一時金（ソーメン、もち代）や失業保険を獲得。手配師のピンハネ、ケタオチ現場やボウリョク飯場、日々の警察の暴力に対しては労働者どうしが力を結集して対抗してきた。そこでの基本路線は、何事も朝のセンターに持ち寄って「仲間に広く訴え、仲間を動員し、大衆的に粉砕する」ことであった。

こうした闘争は、あらゆる労働者が自身の境遇を語り合える「場」があることがなにより大事だった。センターは労働者にとって宝である。しかしこれから新しく作り変えられるセンターで、行政の管理と監視が行き届いた空間で、労働者たちが権力者からの見張りなしの「安心安全」な、真に自由で、自律的な語り合いができるだろうか？

自律的なセンターの役割は、野宿者にとっても、さらにこれから増える外国人労働者たちのためにも重要である。また非正規の介護士・ヘルパー・看護師や飲み屋で働く女性たちの権利獲得もふくめた闘いを、ともにつくっていかなければならない。

今年の春闘では大手企業を中心に基本給の賃上げが行われた。しかしその賃上げは労働者に還元されるどころか、人件費は減少し、株主への配当金が増え、内部留保が過去最高金額を記録した。そんな状況でも長期化するウクライナ戦争によって物価は高騰し続け、食料品をはじめ、ガスや電気などは桁外れに値上がりし、そこに追い討ちをかけるように軍事費拡大による増税が日々の生活をさらに苦しめる。

闘うナショナル・センターは春闘でたかだか月５千円ほどの給料アップを勝ち取っても物価高騰を乗り切れないため、月３万円を要求するストライキに入った。このストライキには病院関係者が多く参加し、「賃上げ、人員増で命を守る職場をつくりたい」と訴えている。さらにアルバイトや派遣、パートで働く非正規労働者もユニオンに個人加盟することで、はじめて賃上げ交渉に臨むことができたものもいる。

だが昨今の状況は、安倍元首相の殺害や岸田現首相の襲撃事件にみられる個人の憤激が、搾取的経済構造を変える闘争へと接続されずにいる。それはなによりも「寄るべなき個人」を救いあげられないこの社会、運動の弱さだといえるだろう。

フランスでは３００万人もの労働者たちが年金受給の年齢引き上げに反対して、ストライキを決行した。ある建設労働者の老人は、自分の息子たちが６０歳を超えても重いセメント袋を運ぶのは本当に大変だと憤っているし、ゴミ収集車の労働者も毎日パッカー車の排気ガスを吸い続けたら年金をもらうまでに死んでしまうと叫ぶ。若者たちも未来を案じて労働者の列に参加する。ストライキによって交通路は遮断され街には収集されないゴミが溢れている。だが、それでも人々はストライキを断固支持する。フランス革命以来、受け継がれてきた政治活動が文化として脈々と息づいている。

メーデーは全世界の労働者の永続的な闘争を想起させるものだ。どんな闘争にも高揚と退潮はある。自分たちの力が微力でも世界から勇気づけられ、つながりを感じることができる。今日この日に、世界で同時に開かれるメーデーをともに祝い、連帯と団結を表明すべく、私たちもともにがんばろう！

がんばろう
突き上げる空に　輪をつなぐ仲間の拳がある　おしよせる仲間の拳がある
闘いはここから　闘いは今から

２０２３年５月１日